薬王寺廃寺

古賀市薬王寺字水落所在

薬王寺廃寺は平安時代の山岳寺院です。古くから山中の平坦地に礎石が並んでいることが知られ、江戸時代の学者青柳種信（あおやぎたねのぶ）の記した「筑前國続風土記拾遺（ちくぜんこくしょくふどきしゅうい）」にも記録されていますが、寺院に関する古文書などは一切残っておらず、造営者や目的など謎につつまれた寺院跡です。

しかし、山岳寺院は数が少なく、残りが良い遺跡はほとんどないため、当時の仏教のあり方を知る貴重な遺跡です。平成３年度から６年度にかけて薬王寺区の協力をいただき、一部の発掘調査を行い、その概要が明らかになりました。

薬王寺廃寺位置図（1/25,000）

▲ 薬王寺廃寺の立地

▲ 基壇の上に建てられた建物（礎石列）

薬王寺山中の標高約150mの南側の急斜面に位置し、山に囲まれているため平野部へ出るには、山越えか深い谷を迂回せねばならず、周囲とは完全に隔絶されています。

調査の結果、斜面を切り開いて造成された大小４面の平坦地上に大小の建物２棟、石垣状の石積、瓦窯が見つかっています。

建物のうち１棟は、東西14m、南北12mの基壇という一段高くした壇上に建築された大型の瓦葺きのもので、今の寺院でいう本堂に当たるものと考えました。周囲からは屋根に葺かれていた瓦が大量に出土しました。また、柱を乗せていた礎石の大部分が残っています。

特に珍しいのが瓦窯の発見で、瓦窯が、寺院跡と同じ場所で見つかることはきわめて珍しく貴重な発見でした。寺院に用いた瓦を焼いたものと考えています。

主な遺物は瓦です。建物の屋根に葺かれていたものですが基壇の補強や装飾に用いられたものもあります。大部分が同じタイプのものですが、面白いことに、出土例は芦屋町の浜口廃寺でわずかにある以外は薬王寺廃寺のみです。瓦の製作時に、表面を羽子板状の道具でたたいて仕上げるため、道具に刻まれた模様が残りますが、薬王寺廃寺のものは「自」いう文字が刻まれた珍しいものです。見つかった瓦窯でこの寺院専用に焼かれたものでしょう。

魔よけのため屋根の隅に飾られた鬼瓦も２種類出土しました。歯を食いしばってどんぐり眼で威嚇する迫力あるデザインです。

その他の出土遺物として、中国産の陶磁器や緑色の釉薬をかけて焼いた緑釉陶器という珍しい焼き物が出土しました。

現在は、保護のために埋め戻しをしており、残念ながら見ることはできません。

▲ 軒丸瓦瓦当

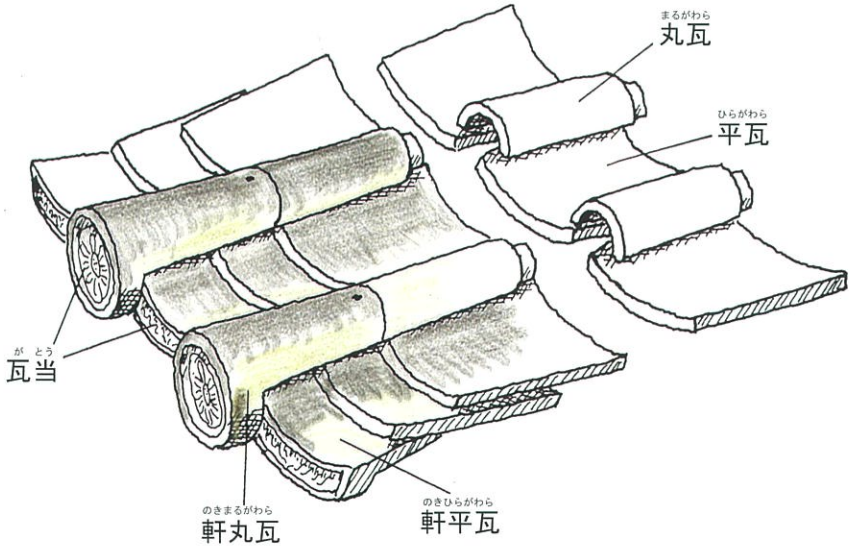
▲ 軒平瓦瓦当

▲ 叩き目の「自」の字

▲ 丸　　瓦

▲ 平　　瓦

▲ 鬼 瓦 1



瓦の葺き方

▲ 鬼 瓦 2

▲ 緑釉陶器